

藤壺物語の主題と構成

—源氏物語第一部前半の世界構成・恋と栄華—

森 一 郎

一

桐壺巻を書いた時、作者は、光源氏の生涯の道すじ、准太上天皇にいたる栄華の道を構想していたと考えられる。

若紫巻の藤壺懷妊の折の夢の予言は、藤壺宮の生みたもう御子が即位し、源氏はその天子の父たるべし、という内容であったと考えられ、この、のちの冷泉院の父たることが、准太上天皇となる必須条件であったことを思うとき、若紫巻の藤壺懷妊の折の夢の予言を示したときには、作者は、源氏を准太上天皇とする意図を蔵していたと推察されうる。滯標巻の予言は明白で、源氏の御子三人の未来が語られ、うち、冷泉院即位という全き予言の実現は既に果されていた。かような予言内容（若紫・滯標の予言）と桐壺巻の光源氏についての予言との間に照応連関を私は考え、「国の親となりて、帝王の上なき位に昇るべき相おはします人」につき、高麗の相人は、准太上天皇ということがわからないまま、天皇か准天皇か准太上天皇か不分明の帝王相という広義の表現として「帝王の上なき位に昇るべき相……」と言ったのではないかと推考を加えた次第であった。¹⁾

つまり、予言の表現そのものが、真の具体的な相の表現としての的確なものではなかったという事情を考え、そして、それゆえにこそ、「あまたたびかたぶきあやしむ」相人の、動揺せる表現としてふさわしいとも考えるのであ

1) 拙稿「桐壺巻の高麗の相人の予言について — 予言の実現と構想・光源氏論の一節 —」（『平安文学研究』第36輯—昭和41年6月—）。

る。

相人自身不可解の光源氏の将来は、ひとり作者の胸中に蔵されていた。それは桐壺巻と近く連接する若紫巻、落標巻の予言内容と照合一致、連関するものでなくてはならないであろう。とすれば、源氏を准太上天皇へと進ませる道すじを、桐壺巻を書いた時に、作者は、構想、意図していたとの推論は成り立つと見てよいであろう、と私は考えるのである。桐壺巻の予言の解釈について、「平安文学研究 第36輯」所載の拙稿は、賛否ともども御教をいただいたが、上述の大要については、以下の論述の立脚点といたしたい。

桐壺巻の時点で、光源氏の将来の道すじの大まかなワクが設定されていたと考えることは、私たち読者として重要な事柄であると思う。

すなわち、光源氏が、天皇とはならず、まずは臣下の道を歩むが、ただし、その臣下の道の背後に、藤壺との密通にもとづく、天子の父の宿世を蔵し、単なる臣下の道ではない栄華が保証され、その帰結が、准太上天皇という身分である、という大綱が、作者の構想にはらまれていたと考えることは、長編としての源氏物語の構造の軸をなす光源氏の世界、つまりは長編としての源氏物語の世界の本質を決するものだからである。

光源氏は、臣下の道を歩むことにおいて政治的人間たらざるを得ず、しかし、この宿世において政治的人間を超えた超俗の世界、風流・好色の理想を可能とするであろう。

この私の言には、結果を知った者の倒叙の匂いがいかなめないが、しかし、光源氏の世界は、皇族の出自およびその宿世にすべてが胚胎し形成されたのであることを否定する人はあるまい。恋愛においても政治においても、それが、その世界形成の根基をなしていた。

だから、桐壺巻の時点で、作者がこの重要な設定をもくろんだとき、光源氏の生涯の展開にかような根基を計量していたことは十分想像されてよいと考えるのだ。

二

藤壺と光源氏の愛の構造には、単なる男と女の思慕、恋愛というよりは榮

華・政治に関与する趣が深い。少なくともプロットについていう限りはまさしくそう考えるほかない。

光源氏の藤壺思慕は、純粹に愛の物語としても深く本源的なものなることを思わせるけれども、きわめて遠心的な（それゆえにこそ、永遠的なと評しうるけれども）愛の構造であり、およそ地上的な愛としての描写はとぼしいのである。

恋のクライマックスの場面に、作者が「をとこ」「をんな」と呼んで、その逢瀬の愛のたかまりを強く印象づける手法は、光源氏の対象とした女君たちとの間に適切に用いられたが、藤壺との逢瀬の場面は「をんな」と呼ばず、「宮」としたところには深い意義が存すると思われる。

そうした場面に、地上的な愛をささげる「をとこ」光源氏は「をんな」としての藤壺の奥に「宮」なる崇高性を仰がねばならず、引き寄せあう男女のいざないの奥に、拒み立つ崇高なイメージを見なくてはならなかった。

これを白鳥処女説話の影響として見られた風巻景次郎博士の御指摘¹⁾が思いあわされるが、発想の根源の問題としてではなく、源氏物語の世界構造の問題として見るとき、藤壺を源氏の永遠の思慕の対象としながらも、これを地上の愛の物語として定着させず、それは紫上を登場させることによって代行せしめたのは、藤壺の役割に愛の情念を表層としつつ、内奥に、光源氏の栄達に関与せしめる政治的意義が意図されていたからだと考えられるのである。

三

そもそも源氏物語第一部の構造は、従来しばしば説かれてきたごとく、単純単一の執筆・成立過程ではない。長編としての大展望を有するにいたった桐壺巻成立の時点で考えるとき、藤壺物語には、若紫巻の懷妊の重くるしい雰囲気につつまれた政治のにおいが予想されている。

政治のにおいとは、藤壺懷妊と同時に源氏に夢の予言がある事実を言うの

1) 「日本文学史の研究」下巻。

である。この懷妊は、愛のしるしとしてめでたがってられるようなものでないことは言うまでもない。そうした純一な愛の物語の徴表としてこの懷妊は目されていず、生まれたまう御子の未来が固く源氏の未来と結びつくことに眼目があるのであった。

もともと、この恋は、あくまで秘密でなければならなかった。作中人物光源氏に密着して、その視点で語りすすめていくこの物語の方法からして、当然、この恋は秘密の様相のままにひそひそと語る文体、幽暗の趣を呈するのであった。¹⁾

愛の物語としてこれを前面に押し出して描写することを考えるのは、客観的に作中人物を展望し操作する小説作家の視点である。作中人物の心情に即して語りすすめるとき、必然的に秘密は秘密の事として語る文体、描写を生む。

藤壺事件は、愛の物語の結晶という印象を表象化するが、それが、あくまで秘密の事として主人公の人生に密着して語り通されることが、構想上、源氏の栄達を生み出す不可分の要件となっているのは注意すべきことであろう。

ところで、若紫巻の源氏と藤壺の逢瀬・密通の場面は、源氏と藤壺との密事の描写としてあらわなものである。唯一の例外というべきこの段の意味は何なのか。

懷妊という重大事の前提としてこの描写は必須であったのではないか。つまり懷妊の因由を、藤壺の生みたまう御子の父は源氏なることを、読者に知らせるためなのであったろうと考える。

逢瀬の場面は、愛の物語として印象的であり重要でもある。が、この藤壺との逢瀬の場面はそれじたいのシーンの感銘もさることながら、それは懷妊への因由としての意味に比重はかかり、そこに本質が存し、一切が結集してくると思われるのである。

懷妊という事の持つ意味が、このばあいあまりに重大であるからであり、

1) 清水好子氏著「源氏の女君」参照。

それに伴う源氏の夢にあらわれる予言がきわめて重大だからである。

この懐妊が、藤壺にとって喜ぶべきことでなく、重大な苦悩事であり、いかにこの秘事を乗り切るべきかと、ひたすら心身を悩まさねばならなかった事件であったことを考え、かつ、光源氏の生涯に深くかかわる予言が告げられたことを考えるとき、作者の構想の心裡は察せられるのではあるまいか。すなわち、事件の本質は私事というよりは公事であり、愛は愛としての世界にとどまりえない、政治的世界にかかわるものであった。より深く、政治的世界の問題としてわが身に迫ってくるべき性質を、藤壺と源氏の二人は感じなくてはならないものであった。

四

藤壺物語が、かように政治的世界の問題としてその中核を形成しているのは、源氏物語の構想の始発において、主人公の運命の形成が、宮廷社会の現実と不可分の政治的運命をたどらせることに決定され、左遷流謫の人物像がつとに確定されていたことと密接不離の関係にある。

主人公光源氏の始発の人物像の準拠には、源高明説、藤原伊周説等があるが、いずれも左遷流謫の人物である。伝承的な貴種流離譚の発想に従ったのだという説が通説化していること周知のごとくだが、左遷流謫として構想したところには、作者の眼が政治に照準を合わせていたことがうかがわれるであろう。

若紫巻には明石の浦のこと、明石の入道やその娘のことが、作中人物の口を通して語られている。読者としてはもとより予想できぬことながら、作者が須磨・明石に主人公を流離せしめる構想を抱いていたことの証左となしうるであろう。

若紫巻の光源氏の夢にあらわれた予言の「その中に違目ありてつつしませたまうべき事なむはべる」というのも、読者や作中人物光源氏には分らぬことながら、作者がここに須磨流謫を考えていたことは推定してよいであろう。

先を知った者の結果論的な倒叙とのみは言われまい。「違目ありてつづしませたまふべき事」と言うとき、須磨流謫の悲運が作者の胸中に形づくられていたと考えることは十分ゆるされるであろう。

藤壺懷妊という事件と、光源氏の須磨流謫とが密接不可分のこととして、作者の構想の眼目にすえられていたことは瞭然であると言ってよい。

藤壺という女性が、光源氏の政治の命運に関与するのは、光源氏が須磨・明石より帰京して後の彼の栄華への道程においていちじるしい。

前斎宮入内という政治的行為において藤壺の果たした役割は、明白に光源氏の栄華への関与、冷泉帝治世への女院としての参与であった。

藤壺は、冷泉帝治世が聖代村上天皇の御代に準すべき「盛りの御代」たることに満足し（絵合巻）、やがて薄雲巻で死ぬ。

藤壺の光源氏の生涯に及ぼす意義は、光源氏の生涯の終焉にいたるまではたらきつつけるのであるが、その死は、構想上、その使命、役割に、構想始発の視点からは、作者が終結を認めたことを意味するであろう。

このち、藤壺が光源氏の生涯に関わるのは、愛の世界（たとえば女三の宮の降嫁）においてである。藤壺の死とともに、光源氏の世界が急速に政治ばなれの方向をたどるのは注意されてよいことだ。

政治的世界が無くなってしまうというのではない。たとえば玉鬘物語にしても政治的世界を読みとらねばならぬ。しかし、より深く風流・恋の世界が深層に及んでいる。¹⁾たとえば、また、柏木と女三の官の密通事件。柏木の悲劇的な死に光源氏の政治的威圧が潜行的にはたらいていたことを見落してはならない。が、これも政治が主題であったわけではない。柏木の悲劇に政

1) 私はかつて「玉鬘物語の構想について―玉鬘の運命をめぐる―」（『国語国文』昭和37年3月号）において、その政治的世界との関わりに玉鬘の運命を見た。が、秋山虔氏の御批正のとおり、（秋山氏著「源氏物語の世界」参照）描かれたる世界の論理と描かれざる世界のそれとの関係は、描かれたる世界の論理が優先するべきものなることを今反省する。もちろん、その折も、政治を優先して読んだわけではないが。そして論の大綱は、改める必要を認めないが、細部の論述にこそ自己の読みの深淺を検討したいのである。

治を大きく取りあげすぎるのは、主題の裏を見て、まるでそれを主題と錯覚・妄想することにすぎない。書かれた言葉の字面の奥を、一語一句深く読みとるのはよい。しかし、うがちすぎは禁物であろう。

さて、もとに立ちもどろう。

藤壺のばあいは、これら（玉鬘物語・柏木物語）と逆なのだ。愛の世界が主調音なのではなく、政治的世界が中核なのだ。

藤壺の役割は、光源氏の政治的命運と深くからみあうところにあった、と、断言してよいのではあるまいか。

藤壺は、光源氏の運命の進展の重要なふしぶしに関与し、したがって長編としての源氏物語の進展をうながした人物であった。

光源氏と藤壺の物語をこのように断ずることは、あまりに物語の長編としての骨格・中核を説明するに急で、その愛の物語としての美的情念の大いなる世界を切り落してしまっているではないか、とおっしゃる方もあろうかと思う。

たとえば、とくに、桐壺巻の、亡き母に似る人としての藤壺思慕の至純さ、そして罪深い恋慕の情への展開としての帚木巻・夕顔巻に隠見する藤壺思慕。若紫巻の逢瀬の場面へと高まる密事の痛切さ。心の内奥をつたえる秘密の恋の物語は、それじたい十分に主題性をなうようである。

しかし、それは物語の世界から抽象しきたったものなのではないか。物語の構成に即して読むとき、すなわち作品の形象の論理に即するとき、——それこそ作品の主題を把握する唯一の正しい方法であろう——構想と主題を単なる「悲恋」に求めえないのである。

私たち読者が、この二人の悲恋を、恋の物語として享受するのは、桐壺巻から夕顔巻あたりまでであるが、そこには確かに主題的展開と言ってもよい重い恋の物語がつたわってくる。しかし、若紫巻にいたると、既に述べたようにその恋の重くるしきは政治のにおいに化していく。この事を、この構成的連関を、どう考えるか、それが私の問おうとする問題であった。

もう一つは文体、文章の問題である。光源氏の藤壺思慕が描写としてあま

りに隠見的であるのは、その密事を密事として語る文章という説明のみで尽くすことができるであろうか。その隠見的な文章が、光源氏の秘密の恋を伝える趣きは確かにつたわってくるが、隠見ということを卒直に、構想論的に見るときは、その悲恋を前面に主題として顕現させる意図がないところに由来するのではないかと考えられるのである。つまり、愛の悲劇は、それじたいとして完結的に物語たりえてはいないのである。

それでは、以下、具体的に藤壺物語の展開をたどってみよう。構成と文体の問題が、そこには相連関するものとして主題解明に集中するようである。

五

私たちは、桐壺巻の、帝と更衣の悲恋に泣く。その桐壺更衣の悲しみの重さに導かれて登場してきた藤壺に、愛の栄光を見いだすことによって、私たちは輝く寵妃のイメージを見る。後宮の愛の勝利者の輝く人生を見る。まさしくその名「かがやく藤壺」の姿を。

この「かがやく藤壺に光る」源氏が思慕を寄せるという展開は、それじたいまさに深く重い主題の設定たりうるであろう。罪深い愛の物語の展開かと読者は緊張する。

桐壺巻末の二人の楽の音の「聞えかよ」う心のつたわりあい、二人の恋が花ひらいたことを指摘された吉沢義則博士の御説は¹⁾鋭い。若紫巻の密通の場面に「宮もあさましかりしをおぼしいづるだに、世ともの御物思ひなるを、さてだにやみなむと深うおぼしたるに……」とあり、それまでの光源氏の恋慕と、既に逢瀬のことのあったこともふりかえられている。

帚木巻に「君は人ひとりの御有様を心のうちに思ひつづけたまふ」と心深く秘めて恋いつづけている女性。女房たちのうわさ話に思わずどきりとして秘事のもれはせぬかとおそれた秘密の恋人。そして、玉上琢彌博士著「源氏物語評釈」（角川書店）の御指摘のごとく、夕顔巻の「秋にもなりぬ。人やりならず、心づくしに思し乱ることどもありて」という深い煩悶を抱きつづ

1) 源氏物語随攷。

けている対象。これらはすべて藤壺宮のことであった。帚木卷冒頭の「さるは、いといたく世をはばかり、まめだちたまひけるほど、なよびかにをかしきことはなくて、交野の少将には笑はれたまひけむかし」という光源氏への批評。中川の紀の守の邸での女房たちのうわさ話の「いといたうまめだちて……されど、さるべきくまには、よくこそかくれありきたまふなれ」という評言。これらはこの頃の源氏の藤壺への恋慕の重き心のすがたを表わしているとは私は考える。

「さるべきくまには、よくこそかくれありきたまふなれ」といううわさ話は、どういう源氏のかくれ遊び、秘密の恋人をいうのであるか。雨夜の品定め折に、厨子の中の手紙——「二のまちの心やすき」——も多くあったことゆえ、そうした、人に見られてもよい手紙の女たちのことを言っているのでもあろうか。しかし、そうした女たちは、宮中の女官たちであつたらうからことさら話題の種にするとも思えない。やはり「やむごとなくせちにかくしたまふ」高貴な方との恋のうわさ話と考えるべきだろう。

もとより藤壺宮とのことを言っているのではあるまい。しかし、当の源氏は、そのことかと思わずどきりとしている。

多くの女官たちとの情事は論議の外なのであり、源氏が派手な恋愛人としての印象を与えていないのは、「かくれありきたまふ」秘密の恋、「せちにかくしたまふ」恋のしかたにあつたといえよう。

高貴な方といえば、六条御息所との恋もこの頃のことなのであるが、夕顔巻の「秋にもなりぬ、人やりならず、心づくしに思はしみだる事どもありて」が藤壺宮のことであり、「六条わたりにも、とけがたかりし御気色をおもむけきこえたまひてのち、ひきかへしなめならむは、いとほしかし、されど、よそなりし御心まどひのやうに、あながちなる事はなきも、いかなることにか、と見えたり」とあるように、夕顔巻の時点では御息所¹⁾には熱がさめている。

1) “長編としての源氏物語”を対象として考える。したがって、「六条わたり」の貴婦人を六条御息所と認める。

この夕顔巻の源氏の熱がさめている時点は源氏十七才の秋であるが、同じ年の夏の夜の雨夜の品定めにも、源氏は「人ひとりの御有様を、心のうちに思ひつづけたまふ」と、藤壺宮ひとりのことを思いつづけている。この時「いでや、上の品と思ふにだに、かたげなる世をと」思うのは、六条御息所との恋にこの時既に熱がさめてきていたことの反映であったと考えられないだろうか。

中川の紀の守の邸で、女房のうわさ話に、思わず藤壺宮のことが気にかかるのは、その事柄の重大さ、秘密にせねばならぬ恋の性質からいって当然である。しかし一方、六条御息所のことが源氏の念頭に浮かばぬのは、それじたいの理由があったのだとも考えられるわけである。

中川の紀の守の邸の女房のうわさ話は、藤壺とのことではないと察せられる。「式部卿の宮の姫君に、朝顔たてまつりたまひし歌などを、すこしほゝゆがめて語るも聞ゆ」とあるように、朝顔の姫君のことは含まれているらしい。「しのびしのびの御方違へ所は、あまたありぬべけれど」とあるように、この頃、内密の恋の上流の方々が多かったというのだから、六条御息所も含めてその他多くの女性との内密の恋が女房たちのうわさ話の対象なのである。

源氏は、藤壺以外のうわさ話と知れば平気になれる。その心裡を考えれば、源氏の心にかに藤壺との恋が重いか、その他の方々との恋はそれに比すればいかに軽いかを知ることができる。

上流の方々との内密の恋はあまたありながら（私たちに分る女君の名は朝顔の姫君、六条御息所などだが）源氏の心に重い恋は一貫して藤壺の上にあり、いかなる上流の貴婦人もそれに代わることができない、という事情に思いをいたさしめられるのである。

源氏の恋のしかたが「かくれありきたまふ」内密のうごき、「せちにかくしたまふ」やり方であるところに、交野少将のような派手な恋愛人と目されなかった因由があるわけだろうが、「いといたく世をはばかり、まめだちたまひけるほど、なよびかにをかしきことはなくて」とまでいわれるのは、秘めに秘めねばならぬ藤壺への重い恋のすがたが言われている、と考えてはじめて納得のいくような内容ではあるまいか。

帚木冒頭の文章は、帚木の並びの中の品物語の序と目されるわけだが、この光源氏への評言は、恋愛人光源氏を批評したもので、事は、中の品物語の序という限定を越えていよう。

隠見する上の品の女性の世界との交渉における源氏の人物像が表明されていると言い得べく、藤壺との重い恋に貫ぬかれた源氏のすがたが、作者の評言にはたらいていたことを前述の理由から考えてみるわけである。

かように見てくると、桐壺巻から夕顔巻までは光源氏の心情を通して、その藤壺への秘密の恋の物語が私たちにつたわってき、愛と美の情念の形象化を感得しうるのである。

六

ところが、若紫巻にいたって、今までかようにひそかに語られ、秘密の恋のヒロインのイメージを与えつづけてきた藤壺宮が、突如として読者の前に姿をあらわす。それも既に触れたように、まことにあらわなラブシーンが描かれるのである。

見方によれば、このラブシーンは藤壺物語の愛のクライマックス、愛の結晶を描いたものとして受けとられるべきものでもあろう。

しかし、私は、このラブシーンがあらわであって、秘密の恋の女主人公のイメージを破ってしまっていることを重視し、その愛と美の情念の形象化はここにおいて筆をとどめられていると考えるのである。

ラブシーンがベッドシーンであることの意味は、前にも述べたように懷妊への前提、因由を説明するものであり、光源氏の未来を生み出す運命的事件であることを語っている。

藤壺は、これ以降光源氏の榮達にかかわる重要な局面に行為する人物像として、そのイメージを印象づけることとなっていくのである。

そのことが、若紫巻においてなされていることの意味を考えてみる必要がある。

若紫巻とはどういう巻であるか。この巻は、若紫（紫上）の登場する巻で

ある。そしてその異様ともいうべき結婚がなされ、以降、その愛の物語は花ひらいていくのである。

言われるように、紫上は藤壺の形代である。すなわち、紫上物語は、藤壺物語の愛の物語を地上の物語として展開させていくべき代行の役割をになうものなのだと言えよう。

桐壺巻から読みすすめていったとき、この移行、代行ということがおのずから承認されるわけである。

ということは、裏返して言えば若紫巻においては、藤壺物語は愛の物語というより栄華の物語なのだと言えないか。愛の物語の世界を紫上物語に転移したのだから。

若紫巻を愛の世界の観点から見るとき、紫上物語にその形象化があることは明らかである。

それまでの藤壺に捧げられていた愛が、現実には愛の世界の物語として展開するためには、かような形代を必要としたということは、藤壺物語を愛の物語として最後まで追求する主題的意図は、作者にとって困難であったことを意味するのであろう。

というより、父の妃との恋、この罪深い恋の物語を恋の問題として主題化することは、もともと作者の意図になかったらしい。

あったとすれば、挫折ということになるが、現在の源氏物語からはその意図が当初存したということをお断じえまい。

「かがやく日の宮」なる巻にさような恋物語が主題化していたことを論じられる方々もあるわけだが、いまは、目にしうるものにもとづいて考えることにしよう。

藤壺への思慕が、光源氏の心情を通して語られ、藤壺の心情が語られはじめたときには、愛の物語の代行が発想せられていて、藤壺の心情は、恋というよりは公の世の人の運命にかかわって痛切な表現となるという成り行きには、藤壺が恋の物語の女主人公としての完成、成就を意図されていなかったことを示すであろう。

桐壺卷末に樂の音を交わして心を通わせたその恋の情念は美しいものながら、さえぎられた恋の、成就しがたい愛の未来を思わせて哀切であった。作者は、いちはやくこの愛の世界の成就には代行のやむなきを考えていたようである。石川徹氏が、桐壺卷末の「思ふやうならむ人をすゑて住まばや」の「思ふやうならむ人」を、藤壺に代り得るような女性とされ、紫上の登場は、桐壺巻に予定されていたのだと看取されたことは、¹⁾ その意味で注目される御説である。

もちろん、あの時点で読者にそのことが予想されうるわけではない。

しかし、「すゑてすまばや」という言い方には、高貴な藤壺宮に対するものとは思えないものがある。また、二条の邸に藤壺宮を迎えるなどとは、実現不可能な妄想というべきである。光源氏のあこがれ、期待は、藤壺のような人というにあったと見るべく、事実、紫上は二条院に迎えられ、彼女の一生のなつかしい邸宅となる。ちなみに紫上の死後、源氏は二条院で彼女を偲んだのであった。（六条院の女方へは時々出かけたのだという待井新一氏の御説²⁾に従う）。

「思ふやうならむ人をすゑて住まばや」という光源氏の願望には、作者の構想意識がちらりと顔をのぞかせていると言えるのであろう。

桐壺巻において、現実の、地上的な愛の対象、愛の物語の対象がいちはやく考えられているということは、作者が当初から藤壺物語を愛の物語として成就完成することの困難を感じてい、その追求にはつとに代行（紫上）をもって果そうとしていた証左と見なしうるであろう。

かくて、藤壺物語にはそのような代行を促すべき愛の根源的な世界が発想されるにとどまり、その完成は当初から意図されていなかった、と考えるのである。

-
- 1) 「源氏物語の恋愛描写とプロットとの関係」（学燈社「国文学」昭和41年6月号）。
 - 2) 「源氏物語幻の巻の解釈—二条院か六条院か—」（「国語と国文学」昭和37年12月号）。

七

藤壺物語が、それじたい愛の物語としての主題性をになわないとすれば、既に見たような光源氏の藤壺思慕は、いかに位相づけるべきなのであるか。

帚木巻、夕顔巻に隠見する藤壺。光源氏的心情を通してのみ浮かびあがる藤壺の像。光源氏の藤壺への重い恋が一貫してつたわってくる文体、描写法ではあるが、帚木の並びの主題が、前面に語られる中の品物語にあり、藤壺物語は主題ではないことを同時に示すものであろう。

ただ、隠見する上の品物語は光源氏の藤壺への重い恋をつたえ、それが、若紫巻に接続する重要な路線の役割を果たしている。そこに構成的役割を認めることができる。

この隠見する上の品物語があればこそ、帚木、空蟬、夕顔三巻は若紫巻につづいて不思議でないのである。以下この点につき述べる。

若紫巻の冒頭に「わらはやみにわづらひたまひて……」と、源氏が病気になっているが、夕顔巻にひきつづいて読むときに、夕顔怪死の心労がまだつづいているのか、と思う読者もあることだろう。¹⁾ このばあい、病気はマリヤのごときものだったが、病気を心身のいたみの必然と考えると当然そうした因由に思いをいたさしめられるであろうからである。

しかし、その因由は夕顔ではなく、藤壺への「人やりならず、心づくしに思ほしみだるる事どもありて」（夕顔巻）という煩悶に求めるべきである。

夕顔怪死は、源氏にとってショックな事件だったにはちがいない。加茂川の堤で落馬するほどの気落ちぶりで、やがて病臥してしまうのだから。

だが、この病気は全快している。だから、若紫巻にまたつづいて夕顔ゆえの病気というのは、接続のぐあいがある。

夕顔巻の主題からの直接的な接続は、末摘花巻冒頭の「思へどもなほ飽かざりし夕顔の露におくれしほどのこちを、年月ふれどおぼし忘れず」に明らかになつづきぐあいを見るのが妥当であろう。

1) ふつうは、このように、夕顔怪死のショックによる光源氏の病弱と考えられているようである。

とすると、夕顔巻と若紫巻はつづかないのか、ということになるだろうが、そうではないのである。その接続が、上の品の世界の流れの隠見するなかでひとすじ重く貫ぬかれた藤壺への思慕・煩悶の情によってなされている。そのように見てこそ、両巻はつづくことが分る。

若紫巻冒頭の源氏の病氣（わらはやみ）の因由というものを考えるとしたら、夕顔が原因で二度病氣というのは変だから、藤壺への思い、煩悶が因由として考えられるわけだが、そのことを可能にしたのは中の品物語を主題として描きながら、上の品の世界の女性を、藤壺への思いを、隠見させる手法だった。

玉上博士の言われる「描かれざる部分が描かれたる部分を支えている¹⁾」という源氏物語の構成技法を実証的にうかがいうる顕著な部分である。

ちなみに、この構成技法は源氏物語全体に及んでいると考えてさしつかえないであろうが、単なる一般的な考え方としてならば、物語に描かれた部分の背後の世界、当代の歴史的社会的背景を考慮して読むということと軌を一にすることになるだけである。描かれたる部分の論理に即することがあくまで大切であって、描かれざる部分の論理の導入は、描かれたる部分の論理に適合従属する限りにおいてなされなくてはならないのである。これは私自身の反省である。

「描かれざる部分」と言っても、書かれた言語によって想見させられるものであってこそ実証的な論理にかなうのである。たとえば「例の……………」という書き方が、当面書かれている事実以前に同様のことが多くあったことを暗示しているといったようなことは、明らかに想見できる「描かれざる部分」であろう。

帚木の並びの物語に隠見する上の品の女性たちの世界、藤壺への光源氏のひそやかな思慕は、物語の背後に隠見する世界として明らかに想見できる。書かれた言語によって実証的に分ることなのである。たとえば「しのびしのびの御方違へ所は、あまたありぬべけれど」（帚木巻）という表現によって、源

1) 「源氏物語の構成」(『文学』昭和27年6月号)。

氏の内密の愛人たちの世界を想見する。それが今主題として物語られている中の品の物語の世界のことではなく、つまり「描かれたる部分」ではなくて「描かれざる部分」ということになるのである。

このような隠見させる技法を実証的に確かめうる部分が、帚木の並びにおいて顕著であるということには、やはり特に理由が存すると考えるべきであろう。

私は上の品の世界との接続、巻名で言えば前は桐壺、後は若紫に接続させるためという点に、この隠見させる手法がとられた理由の少なくとも一つがあると思う。

それが、この帚木の並びの主題が明らかに中の品物語であって、描く世界は中の品の世界であるにもかかわらず、上の品の世界を隠見させた理由である。

それは、上の品の世界と上の品の世界の中間に、中の品物語をおくことによって生ずる上の品の世界の物語の中断的現象を防ぐためであったのだが、作者が、それを上の品の世界の主題性への接続ということに意をそそいでいることに注意しなくてはならないと思う。

式部卿の宮の姫君（朝顔の姫君）や六条御息所が隠見しているが、前者のばあい、中川の紀の守の邸でどきりとした源氏の心情は言うまでもなく藤壺宮の上にあり、式部卿宮の姫君との事と知って安心しているということから考えると、藤壺への思慕をきわだたせる完全なワキ役でしかない。また、六条御息所は夕顔への愛に傾斜する一つの因由（葵上もあるうけれど）でもあるが、夕顔巻の「秋にもなりぬ、人やりならず、心づくしに思ほしみだる事どもありて……」のところで、「六条わたりにも……」と冷却した御息所への態度がのべられていて、同じ箇所「おほとんにはたえまおきつつ」とある葵上への冷い態度と共に、藤壺のみへの限らない心の傾斜を語るワキ役とせしめられている。

上の品の世界は、ただ背景の風俗描写ではない。単に上の品の世界に光源氏の真の生活があるというようなことを知らせるためでもない。実に、光源氏の藤壺への思慕を貫ぬかせ、そのことを読者に知らせる意図であったのだ。

八

かくて、桐壺巻に萌芽を見せた藤壺物語の愛の序曲は、帚木の並びに影のように点綴されて、秘めたる恋を若紫巻の主題へとつなぐたのである。

恋愛の序曲は若紫巻の主題に結集し高まることによって、おのずから、その構成的位相を明らかにしたのである。

影のように点綴する技法によって「接続」の機能を果たすとき、それじたいは主題でないことを明白にしつつ、本流の主題への従属的役割を果たしたのである。

若紫巻にいたるまでの藤壺物語に愛の物語を享受することはできても、それは主題として構成された物語ではなかったと言うのはこのような意味からである。

若紫巻にいたるまでの藤壺への思慕は、若紫巻の密通、懷妊への前提としての従属的意味を持つ。若紫巻に姿をあらわす藤壺、懊悩する心情の志向性、すなわち政治的世界の問題にこそ藤壺物語の中核の主題があり、かような主題、密通、懷妊という重大事件を説明するために、その因由を語るために、その连接的な役割として、桐壺巻や帚木の並び、特に帚木の並びは意図して書かれている。

若紫起筆説に完全同意するということはしばらくおくとして、構想の始発に若紫から須磨への路線、すなわち、光源氏の政治的命運のことが定められていたという考え方には十分うなずけるものがある。

桐壺巻が、長編としての構想が立てられたときの始発であることは言うまでもないが、源高明を準拠とする一世の源氏の生い立ちがしるされたときには、その須磨流謫という政治的命運が予想されていたはずだ。

若紫巻から須磨巻への路線には、主人公の運命の物語がドラマティックに主題として高まっている。その運命的物語の中核をなすのが藤壺事件である。

物語の文学的な主題として、主人公の運命の問題として、物語らしく愛の世界を表層としつつ、その実、政治的な運命を語るという構造において、劇的な世界を構成するこの路線にこそ長編としての源氏物語の構想始発の中核、

ヤマバがあったということは認められよう。

されば、主人公の生い立ちをえがくにあたり、源高明準抛による一世源氏の光る君の像を造型した意味は重大で、その造型じたいにすでに政治的運命——左遷——ははらまれているのであるから、若紫巻から須磨巻への路線をつとに大きく包容するものであったのである。

そこに首巻としての役割、意義を充足させていることは確かである。¹⁾

天子の父たるべき命運（若紫巻の藤壺懷妊）を予想・包括することによって、桐壺巻の時点で准太上天皇という究極点をも作者は見定めていたであろうと考えるのであるが、そこに、きわめて高い政治的顕栄を有しながらも、政治的人間を超えた風姿・属性を可能とする人物造型の計算が施されていたであろうことを察するのである。

帚木巻冒頭の、ゝ恋愛人ゝと現実のゝ社会人ゝとの合体を特質とする光源氏像の宣言は、かような光源氏の宿世とかたく結びつくものであったのである。

九

したがって、源氏物語の世界は、かような光源氏像との必然的な結晶点に成立するべく、愛と栄華のあやなす有機的結合を本質とするようである。

私は、そのことを、源氏物語構想始発の中核をなすと見られる藤壺物語に視点を置いて考察をめぐらしたのであるが、このことは、先行する桐壺更衣の悲劇の物語において同様の構造が見られるのである。

桐壺巻の文学的な主題が、桐壺帝の桐壺更衣に対する寵愛の長恨歌的悲愁によって発し、桐壺更衣に代わる寵妃藤壺宮への光源氏のオイジプス・コンプレックスというふうに愛の物語としての色あいを濃くしているのは、何よりも物語らしく愛の世界を表層とする意図によるのであろう。

しかし、桐壺更衣の悲劇が宮廷社会の政治的世界に由来することは論をま

1) 池田勉博士「源氏物語『桐壺』の作品構造をめぐって」（成城大学創立十周年記念論文集）参照。

たないであろう。

朧月夜物語も単なる愛の物語ではなく、光源氏の政治的運命に関わるものとなっている。

明石上物語にしても、明石姫君を核として単なる愛情物語ではなく光源氏の政治的運命を促すものであった。

ところでしかし、かような世界構造の特質は、藤壺の死をさかいとして変貌をとげる。この事からみても、藤壺を中核とする光源氏の物語の世界構造、換言すれば第一部前半の源氏物語構想始発の世界構造の特質が解ける思いがするのである。

以後の物語の中核をになう女主人公は紫上であるが、光源氏像はとみに愛恋の世界の主人公の風姿の色あいを加えていく。

紫上物語は、源氏物語における愛の物語として、第一部前半の世界の特質からはなれたかたちで純一に愛の世界を追求したものと言えるであろう。

藤壺への深い思慕を、地上の物語（現実の世界に実現させるという意味）として形象化するべく、いわば「代行」の意図をもって発想主題化したところにその因由があるのだが、紫上が源氏物語の女主人公と目された最大の理由がここにあった。

愛の物語を主題として深化、発展するすがたにこそ昔も今も読者の心は大きくひきつけられるのであろう。

紫上物語については、稿を改めて論じなくてはならない。

（昭和41年8月15日稿）